

いの自治体の内、約 500 ぐらいの自治体が、人口が 5,000 人から 1 万人という、小さな自治体でもいろいろ住民のための活動をやっているというところである。決して合併をした自治体ばかりでなく、未合併のところもたくさんあるということである。

第 2 章は地方財政と分権改革ということで、財政学をやっている岩手大学の井上博夫さんである。小泉構想のもとでいわゆる三位一体改革ということをして、自治体の財政を国から地方に移すということが一つのスローガンになった。しかしその中でやられたことは地方の切捨てということで、われわれの生活の中でいろんな問題が出ている。何よりも最近の特徴で言えば、生活保護の受給者がこの 10 年間ぐらいの間に 1.5 倍以上増加しているという実態が明らかになっている。

そういう中で第 3 章。北東北農業の置かれている状況ということで、これも岩手大学の横山さんが書いています。

それから第 4 章。北東北の自然と産業。稲作の視点からということで寺井さんが書いています。

労働の問題で言えば第 5 章。北

東北三県の失業構造。

第 6 章 北東北三県の少子高齢化が与えている社会的経済的影響ということで、とくにこの失業構造や少子高齢化という点で言えば、とにかくこの北東北三県が人口が極めて減少している。で、この三県の人口が一番多かった年が 1985 年ごろ、昭和 60 年ごろだけれども、それから見ると北東北三県はすべて 10% 以上の人口が減少している。それからこの三県が全国の中でも一番失業率が高い。そういう状況などを分析している。

そして第 7 章。北東北三県の商業とまちづくり。北東北三県の中で言えば盛岡が多少人口が横ばいになっていて、そのほか秋田、青森、弘前などの商都市では町の中核的な商店街がほとんど客が 10% 以上減少しているという状況が生まれている。例えば弘前の中では中核的な商業施設と言われた「ジョッパル」、これが撤退し、駅の、町の真ん中にそういう空洞化した施設が残っていると、こういうことである。

第 8 章 北東北地域の生活問題で言えば、人口の減少それから買い物に行く場所が非常に少な

くなってきている。それから公医療が撤退しているというのもあるけれども、さらに農村部の中では人口の減少、高齢化という中で、地域医療それから学校が減っていく、また交通機関が非常に不便になる。こういうような動向が見られている。その中で限界集落という言葉が有名になったけれども、最近では限界集落だけではなくて限界自治体という言葉なんかも使われるという状況である。

そして第 9 章。そういう中で唯一地域再生の取組として重視されているのが観光と地域振興ということで、観光業であるわけだが、これも非常に不況の中で、いわゆる従来型の観光というところには人は来ない。決してこの地方が観光で光があたっているという事例ではないということである。

そういう中で第 10 章。地域活性化、住民参加の課題ということは大きな焦点になってきている。こういうさまざまな厳しい状況の中でも、この本の中でもいくつかの事例を挙げているけれども、地域の資源それから地域のブランドを活かしたまちづくりということがやはり大きな、今後の地

域経済のあり方を考えていくときの展望だろうと、で、そのためにはやっぱり一つは住民自身が地域の資源、それから地域社会の見直しというところで、そういう発言をしていくことが必要であろうということである。

で、第 11 章。私自身が北東北地域の特質と展望というところを書いている。その中で、多少青森県の政策の中で、いろいろ大きな変化も出てきているということもある。その一つとして指摘しておきたいことは、2007 年版の青森県の「社会経済白書」、ここに非常に注目できる見解が書かれている。

#### 《従来の考え方》

青森県というのはこれまでもいろいろな面で全国的な経済的・社会的指標で言うと非常に下位にある。そしてそのために青森県の発展のために何が必要なのかという点でやってきたことは、第一次産業からの脱却を目指し、農業労働に代わる工場誘致や IT 産業など、最先端技術の導入が目論まれてきた。その代表的な事例が青森県六ヶ所村のむつ小川原開発用地に誘致された核燃サ

イクル施設、つまり大きな企業、それからそういう工業施設を導入することによって地域の経済は活性化するんだという考え方である。この考え方は産業構造の高度化という言葉で表現されているけれども、元の知事の北村氏の考え方で、産業構造の高度化をはかれば、それに波及して地域も活性化され、地域経済が発展していくという考え方である。

#### 《注目すべき県社会経済白書の考え方》

このような考え方に対して、かなり以前からこういう外来的な大型開発というのは、それだけでは地域経済は発展しないんだということを言っている。

その点に関して2007年の青森県経済白書を見ると「本県経済の脆弱さの要因として、公共部門への依存体質や、製造業の集積の薄さ、成長産業種不在の産業構造等が指摘されてきたところであり、その対策として、工業団地の造成や、企業誘致など、開発にウエイトを置いた産業政策がとられてきた。」しかし「これまでのように、待っていればいずれは景気が回復し、あるいは公共投資に

よって助けてもらえるという、外部依存体質の地方経済が、もはや立ち行かなくなっていることを意味している。」と分析している。で、その上で「戦後、農林水産業を主体とした産業構造から出発した本県経済が、50年以上かけて、全国を後追いつける形で目指してきた行先の延長線上には、自立的経済構造という名のゴールは存在していなかったということ」を物語っている。」そして「地域経済の繁栄は、その地域に根ざした産業を強化し、成長させていく道筋の延長線上に見出されるものであり、全国のトレンドを追いかけている限りは、他と比べて優位な地位を獲得する可能性は低いということである。」と。こういうところまで今日言わざるを得なくなっている。

まさにわれわれがこの10年間、青森県経済を立て直そうとするのであれば、そういう外来型の産業だけに目を向けるのではなくて、内発的な発展ということを掲げた方向を考えるべきであるということを言っているわけである。

そういう点でこの北東北の中で、いろいろな実践、例えば地産

## 地域自治研の10年を振り返って～今後を展

望する～ 神田 健策

(その1)

第10回定期総会で神田副理事長が標題の講演を行ないました。その要旨を載せます。

#### 《はじめに》

10年間を振り返ってみて、今後の自治研活動をどのように発展させていったらいいだろうか、そういう一つの課題について話したい。

21世紀に入ってから我が国の政治、経済の混乱は言うまでもないが、これだけ首相が代わってもそんなに変化がないんだからと言う人もいたけれども、異常な状況だというふうに思う。

一番大きな変化はグローバル化というキーワードだと思う。国際的にもいまグローバル化の中で、2008年のサブプライムローン問題に端を発するアメリカ金融の混乱、強欲資本主義という言

葉があるけれども、いわゆる資本主義社会、利潤を追求するというこの社会の仕組みは、行き着くところまで行ってしまったという状況だ。

その中でも一番大きな問題は地域の経済、地方の社会は非常に混乱に陥っているということがこの間の特徴だと思う。

#### 《北東北の地域分析》

私どもはこの3月に「グローバル下の北東北地域～地域経済・財政・住民福祉の現状～」という本をつくった。これは学生に対する教科書としてつくったもので、弘前大学、岩手大学、秋田大学の教員8人で分析したものである。その中身は第1章は自治体再編：市町村合併と道州制構想ということで、大坪さんが書いたものである。この間の特徴として平成の大合併ということで、現在自治体の数が1,800ぐらいか、さらにそれを割る状況にある。非常に自治体の数が減らされて来ている。そういう中でも最近、自治体問題研究所が10年前からやってきたことであるけれども、いわゆる小さくても輝く自治体の連合をつくらうという動きがある。1,800ぐら

だと思うが、看板の下は圧倒的に多くがシャッターを降ろしたままである。町のさびれている様は隠しようもなく人通りも少ない。唯一、花畑牧場の近辺だけは観光客でにぎわっているようだが、おそらく一時的なものだろう。山田洋次の「幸せの黄色いハンカチ」に関連する場所やメロン城といった、かつてはにぎわったであろう観光地にも立ち寄ったが、中国からの観光客がちらほら見受けられた程度であった。観光を目玉にすることだけではこの窮地を脱することは無理だろう。やっぱり内発的な産業を地道に計画的に作り出していくほかないような気がする。

役場の廊下は暗くひっそりと静まり返っている。一時間いただけでももちろんその内実をつかめるわけではないが、気のせいかな、職員の顔にも役場内にも活気が感じられない。4年前は全国から多くの支援物資が届き、連日のように激励のメッセージが寄せられたであろうことを想像させる階段の壁に貼られた有名人からの支援の数十枚の色紙が色あせて見えるのも気のせいだろうか。

《「会報」への感想が寄せられています。ありがとうございます》

◎拝啓。「会報」53号ありがとうございます。安西様の教科書問題、そして農業政策についての横山様のご考察と現況と課題について改めて理解させていただき、有意義な参考となる内容として拝見させていただきました。

総会のご盛会とご発展をお祈りいたしております。

◎前略。平素のご活躍に敬意を表します。54号を迎えた御自治研の会報ありがとうございます。

第10回総会。また今後のご活躍、方針について有意義に拝見させていただいております。一層のご健勝ご発展をお祈り申し上げます。

— 以上は西成 辰雄氏からです。 —

◎新役員の皆様ご苦労様。第10回定期総会での発言、興味深く読ませていただきました。是非ここで提起された問題について、自治研の力量と相談しながら確実に前に進めて行ってほしいと思います。

— 以上は柄沢 博之氏からです。 —

地消、都市と農村の交流、食農教育、農産物加工、直売場、農商工連携、地域資源の活用などの多様かつ意欲的な実践が広がっていく、それから最近だと米粉、飼料米など米の多様な活用や、間伐材を利用したバイオマス燃料、それから海産物を利用したエタノール化など、ちょっと上げただけでも地域資源の積極的活用に向けた研究と実用化が重要な政策課題になっているということはお分かりいただけるだろうと思う。

《中小企業の振興》

さらにもう一点だけ言えば、この間、青森県は中小企業の振興ということで、2007年の12月に青森県中小企業振興基本条例を全会一致で可決成立させている。で、いまこの中小企業振興基本条例というのは、国のレベルで中小企業同友会等々が中心になって進めてきたわけだけれども、中小企業を振興させなければ地方の経済は成り立っていかないという考え方のもとに、中小企業の見直しという、そういう振興条例が国のレベルでも、条例じゃなくて法律ですね、そういうものができかけつつあるという状況になって

いるかと思う。

一部この本の中で、われわれがグローバル下の地域の中でどんな変化が北東北の中で起きているのかということ話をしたけれども、こういう視点に立ってこの間の自治研の活動をやってきたことは意味のあることであったというふうに思っている。

《青森自治研の10年》

そういうグローバル下の地域経済、青森県経済のおかれている状況の中で、青森自治研のこの10年を振り返ってみたい。

青森自治研は2000年の12月17日に設立された。2000年の12月は20世紀だけれども、「20世紀に小さく産んで21世紀に大きく育てる」ということをモットーに設立した。

《東北6県では最初》

東北6県の中で、宮城県に自治研というものがあるけれども、宮城県の自治研は中央の自治研と友好関係にあるということになっていて、まあ、いわゆる自治研としては青森県が最初になっている。で、その動きは現在福島、岩手も設立に動いて、岩手は昨年

の、ちょうど1年ぐらい前に設立された。

#### 《活動を継続した10年》

これはそれ以前の東北地区6県持ち回りの自治研集会在契機となって作られたわけだけでも、現在まで理事会が44回、「会報」が53号。従って、理事会は年4~5回。「会報」が年5回。こういう数値に見られるように、確かに小さく産んで大きく育てるがモットーであったが、まあ、継続して自治研活動を続けてきたこの10年であったという特徴をもっていると思う。

#### 《諸活動の特徴》

##### (1) 研究セミナー集会開催。

2001年に弘前で研究セミナー集会を開いたあとに、浅虫→川内→八戸→五所川原→平川→十和田→大鰐→浅虫と、毎年秋に研究セミナーを開いてきた。

今年の第10回は西北地域をいまのところ予定をしているけれども、途絶えることなく毎年開いてきた。で、県内持ち回りで毎回50名から100名、まあ、100名を超えたときもあったけれども、それなりの地域の自治体経済、社

会に関する講演とシンポジウムだ。とくにその開催地域がその時点で抱える諸問題、そして団体報告。で、団体報告の中でもその地域で活躍している人たちに登場してもらって、地域おこしのそういう団体等を励ますと同時に、お互いに活動のエールを送るというような形でやってきたというふう思う。(つづく)

セミナーは11月13~14  
を検討

今年の第10回自治体・地域づくりセミナーは、11月13日(土)~14日(日)、五所川原のホテルサンルートで開催することを検討しています。

詳しいことは9月30日に予定している第46回理事会で決まることとなりますが、いまから予定しておいてください。

※会費の納入をお願いします。  
2010年度およびそれ以前の未納分です。

## 青森県地域・自治体問題研究所 会報

2010年9月28日 第55号

【事務局】青森自治研 三上正悟

〒030-0852 青森市大字大野字若宮 165-19

TEL 017-762-6234

# 自治研

### 夕張はいま

副理事長 西崎 昭吉

8月下旬、自家用車でめぐる「北海道ゆったり旅」の計画をたて、愛犬2匹をともなって久しぶりに津軽海峡をわたった。埼玉にいる兄の急死で、この旅は4日目の富良野で中断、帰路に着く羽目になってしまったが、函館から高速道路を乗り継いで旭川に向かう途中の風景やみちの駅で見つける北海道ならではの食を愉しみながらの旅は途中で終えるにはあまりに名残惜しい旅であった。残念ながら本州よりも厳しいかと思える暑さに閉口気味であったが、機会があれば再挑戦したいものだ。

旅の途中、夕張に立ち寄った。4年前、市の財政破綻が表面化し、国の財政再建団体に指定(現在は財政再生団体)され、17年間で320億円あまりの赤字解消計画に乗り出した夕張市、マスコミでは連日のように、ハコモノ行政や「無軌道な財政投資の失敗」として非難する報道がなされたことは記憶に新しい。「第二の夕張になるな」と全国で自治体財政引締めも行なわれてきたが、国・地方の借金は膨らむ一方である。夕張では全国から“支援の輪”が広がり、昨年には「花畑牧場」「ツムラ」の企業進出や「夕張屋台村」「夕張鹿鳴館」など飲食店の出店が相次ぎ、“再生”の道を歩もうとしていると伝えられている。

夕張に足を踏み入れて気がつくのは、「夕張メロン」のノボリを立てている店の多さと、街中にあふれる映画の看板だろうか。さすが映画祭で有名な町